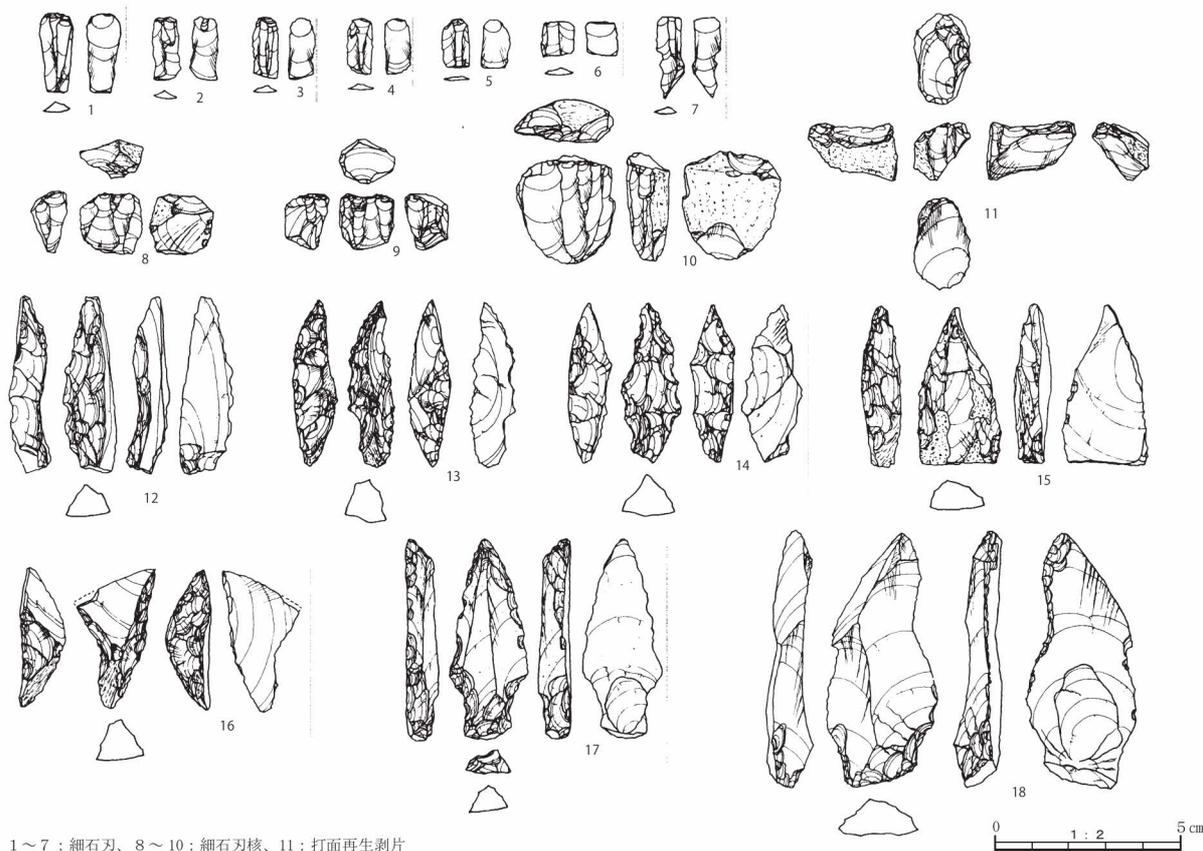


第2章 調査の経緯

1. 調査の経緯

前述の河原第14遺跡および第3遺跡の調査は、当該地域における旧石器時代石器群の一端を知るうえで大きな成果を挙げたが、後期旧石器時代前半期（河原第14遺跡第1文化層）と後期旧石器時代末の終末期ナイフ形石器群（百花台型台形石器含む）や細石刃石器群（河原第14遺跡第3文化層、河原第3遺跡第5・6文化層）との間の石器群の様相は、定型石器が少なさやローカル石材の利用などの特徴もあり、やや不明瞭である。これは、他文化層で卓越する遠隔地産石材（西北九州産石材）利用との対照性という点で重要で



1～7：細石刃、8～10：細石刃核、11：打面再生剥片
 12：国府型ナイフ形石器、13・14：角錐状石器、16：狸谷型ナイフ形石器、17-18：剥片尖頭器

第6図 河原第6遺跡採集の石器（木崎 1985 より）

あるが、他地域との比較においては評価が難しい。この点で、河原第6遺跡では、剥片尖頭器や角錐状石器、切出形ナイフ形石器、国府系ナイフ形石器、細石刃、細石刃核など他地域と比較可能な定型石器が採集されており（第6図）、しかも複数の時期（文化層）の存在が予想されることから、両遺跡での調査成果を補完可能である。また、河原第3遺跡に隣接していることも遺跡間関係を考えるうえでも有益であることを勘案して、今回の調査対象遺跡に選定した。

2. 第1次調査の成果

河原第6遺跡では、熊本大学文学部考古学研究室が2004年9～10月に土壌堆積や文化層の確認を目的とした試掘調査を実施している（第1次調査）。この調査は、現在遺跡を南北に分断している菊池人吉林道から南東方向に入る農道の交差点北側の平坦地に1m×1mの調査区2つ（1・2トレンチ）と、その西方約13mの地点に2m×1mの調査区（3トレンチ）を設けて実施した。その結果、東方の1・2トレンチでは後世の造成土が70～100cmほど堆積しており、現地形はおおむね平坦であるのに対して、旧地形は北東方向に大きく標高を下げていた。両トレンチでは厚い造成土によって下方の旧石器時代の土層まで到達できなかった。西方の3トレンチでは、比較的造成土が薄く、旧石器時代の堆積土を確認したが、剥片2点が出土したのみであった（中村編 2005）。この成果から、平坦地を形成している現在の地形は、県道敷設にともなって造成されてできたものであることが明らかとなった。遺跡発見者の福田正文氏と発見当時石器を採集した小畑弘己氏によれば、石器はさらに東側の切通し（当時）で採集できたとの証言から、遺跡の本体は第1次調査区よりも東側の鞍部である可能性が高いと考えられる。